

ベルリン市と東京都の友好都市提携20周年に寄せて

秋山俊行(東京都副知事)

1994年5月14日、鈴木都知事(当時)を中心とする東京都友好代表団はベルリン市を訪問し、ディーブゲン(Eberhard DIEPGEN)ベルリン市長(当時)との間でベルリン市と東京都が友好都市関係を締結することを宣言する共同宣言に調印しました。以来、両都市は文化や青少年の交流などを通じて友好親善を一層促進するとともに、市民間の相互理解も深めて参りました。2014年に友好都市提携20周年を迎えるにあたり、東京都副知事として、改めてこれまでの交流を振り返るとともに、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた東京都の取組をご紹介します。

ベルリン市と東京都の友好都市交流の歩み

ベルリン市と東京都は、戦後、廃墟の

中から復興と発展を遂げてきたという共通の歩みを持った都市です。その歩みの過程において、東京都は東西双方ベルリンとの間で菩提樹の受領、表敬訪問など着実に交流を続けてきました。1988年には、ベルリン開都750周年記念事業に外務長が参加したほか、鈴木知事が主催した世界大都市サミット会議に数度にわたり、ベルリン市長に参加いただいております。友好都市提携の前年にあたる1993年に、ベルリン市において「東京・ベルリンシンポジウム」を共同開催した折には、牧野副知事(当時)が参加し、大いに議論を深めました。

1994年、いよいよ機が熟し共同宣言の調印に訪れた際には、鈴木知事がフンボルト大学において「東京の産業振興とまちづくり」と題した講演を行い、東京の未来について自らのビジョンをベルリン市

民と共有しました。また、森鷗外が寄宿した家屋を往時のままに復元し、森鷗外記念館として大切に保存したベルリン市民の姿勢に大変感銘を受けたそうです。

1997年に開催された第24回ベルリンマラソンでは、東京から派遣された3名の選手がベルリン市民の皆様の応援を背に、ベルリンの美しい市街地を駆け抜けました。2006年には、ベルリン市が主催した友好都市ユースサッカー大会に東京代表チームが参加しています。東京のチームはなんとトーナメントで優勝し、凱旋帰国して石原知事(当時)に成績を報告するというお土産もつきました。

2009年に石原知事がベルリン市を訪問した際には、ベルリン市の芸術文化振興策に大いに刺激を受け、これをきっかけにクンストラウム・クロイツベルク/バタニエンとトーキョーワンダーサイト間で

目次

巻頭寄稿文 ベルリン市と東京都の友好都市提携 秋山俊行	1~2
会議報告 地域社会の再生	3
人的交流事業 ヤングリーダーズ・フォーラム	4
人的交流事業 日独学生青年リーダー交流	5
2014年事業案内	6~7
2013年秋の事業報告	8



2013年11月28日から30日にかけて東京で第22回日独フォーラム全体会議を開催しました。写真は岸田文雄外務大臣主催のレセプションにおける日独フォーラム委員。

アーティストのレジデンス交流を立ち上げました。私は当時この立ち上げを担当しておりましたが、この交流が今日に続き、多くの若手アーティストの才能の発掘、そしてアーティスト自身の視野の拡大に寄与していることを喜ばしく思います。また、昨年2012年にベルリンで開催されたアジア欧州会合(ASEM)知事・市長会合の機会には、私自身が副知事としてヴォーヴェライト(Klaus WOWERIT)市長に面会し、さらなる交流の促進について意見を交わしたところでした。

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催とベルリン市との今後

さて、2012年に就任した猪瀬知事の下、東京は2020年夏季オリンピック・パラリンピック競技大会の開催都市という大役を預かることになりました。世界最大、最高のスポーツイベントであるオリンピック・パラリンピックを東京で開催できることは、大変光栄なことでもあります。2020年大会が未来を担う世界中の子供たちに夢と希望を与える大会となるよう、東京都一丸となって取り組んでいきます。また、オリンピック・パラリンピックの開催都市にふさわしい、「安心・希望・成長」を実感できる国際都市、「一人ひとりが輝く都市」にしていかなくてはならないと考えています。そのため、東京は大会のビジョンとして、「Discover Tomorrow」(未来(あした)をつかもう)を掲げました。

21世紀を迎え、ベルリンと東京という成熟都市の住民である私たちは、豊かな社会に暮らしております。しかし同時に地

球温暖化、エネルギーの問題、急速に進む少子高齢化など発展段階にある世界の都市がいずれ直面することになる課題を先取りする位置にあります。その意味において、私たちは世界で最も「明日」に近いところにいるのです。

20年前、鈴木知事はベルリンから帰国した後、「大都市問題は世界が共通して直面する大変難しい問題であり、この解決に向けては、世界の大都市が互いに手を携えて、取り組んでいかなければならないと改めて感じたところでした。」と述べました。東京都はこの20年間、大気汚染などの環境問題を皮切りに様々な課題に全力で取り組み、また解決して参りました。しかしながら、社会情勢の変化とともに新たな課題は尽きることなく発生し、むしろ複雑さを増しているとも言えるでしょう。

私たちは、こうした課題を乗り越え、自ら新しい未来をつくらなければなりません。そのためにも、ベルリンと東京は互いの持つ先進的なノウハウを共有し、都市問題の解決にともに取り組んでいかなければなりません。東西ヨーロッパの架け橋たるベルリン市とアジアの文化・経済・政治の中心地たる東京都が友好都市関係を結んだことは、今日に至ってもその意義を失わないどころか、ますます意義を大きくしているのです。両都市の友好交流関係は、猪瀬知事の下、より一層深まることでしょう。

これまで日独交流の架け橋としてベルリン市と東京都の歩みを見守り、また育んでいただいた読者の皆様には、引き続き両都市の交流を御支援いただければ、東京都副知事として感謝に耐えません。



クラウス・ヴォーヴェライト(Klaus WOWERIT)ベルリン市長と秋山東京都副知事(写真提供:東京都)

jdzb echo』読者の皆様

2014年は、東京都とベルリン市が友好都市となって20周年にあたる。先ごろ2020年の夏季オリンピック・パラリンピック競技大会の誘致に成功した東京都の秋山俊行副知事に友好都市交流の歩みを振り返っていただいた。両市は交流の当初から大都市の課題解決と未来への発展に向けての対話を重ねてきた。54件に上る日独自治体間の友好提携の中で、東京都とベルリン市の例は最大規模の自治体間の提携である。明年が、東京都とベルリン市にとり意義深く、日独の他の友好提携自治体にとっても示唆に富む年になることが望まれる。

日独の未来は若者たちが形成する。今号では、2件の日独青年交流事業に参加した青年に各々の事業での経験と発見を報告して貰った。日独ヤングリーダーズフォーラムでは世界の未来を構想するという国境のない視点の獲得に取り組み、日独学生青年リーダー交流では異なる文化の間で相手側の視点で見る柔軟さの重要性を学んだ。こうした若者が日独関係を支える時代を期待したい。

2011年3月の東日本大震災後にベルリン日独センターに寄せられた寄付金を寄贈した、宮城県への二つの施設の現況を報告した。寄付金が有効に活用されていることを寄付者の皆様とともに喜びたい。

坂戸勝

ベルリン日独センター副事務総長

jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙『jdzb echo』は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行 ベルリン日独センター(JDZB)
編集 ミハエル・ニーマン
(Michael NIEMANN)
E-Mail mniemann@jdzb.de

本紙『jdzb echo』はPDF版をホームページからダウンロードすることも、eメールでの定期購読も可能です。

連絡先

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany
Tel: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdzb@jdzb.de URL: http://www.jdzb.de

図書館の開館時間は火曜日と水曜日正午～午後6時、木曜日午前10時～午後4時です。蔵書借り出しも可能です。

ベルリン日独センターは2013年11月1日に東北大学および一般財団法人計量計画研究所と協力し、日独シンポジウム「人口減少下における地域社会の再生」を仙台で開催しました。以下は同シンポジウムの報告と、東日本大震災後にベルリン日独センターが義捐金を届けた仙台市内の機関を訪問した報告です。

ミハエル・ニーマン (Michael NIEMANN)、ベルリン日独センター広報部長

東北で開催した日独シンポジウム「人口減少下における地域社会の再生」では、少子高齢化時代における地方の過疎化を様々な視点から考察しました。日独両国の人口動態が類似する変遷を示すなか、日本では東日本大震災、ドイツでは東西ドイツの統一という外的要因が加わり、特定地域の過疎化に拍車がかかりました。そこで、そのような地域の活性化に資する都市計画、エネルギー政策、産業政策を日独比較検討する目的で、本シンポジウムを企画しました。

シンポジウム席上では、世界中いたるところで進む地方の過疎化および都市への人口集中に歯止めをかけるためには抜本的な構造改革が必要との認識が共有され、様々な対応策が紹介されました。

積極的誘致

地方にUターンする吸引力として津波被害地の農業再生や地元の経済産業振興公社の強化を通じた雇用創出と経済の活性化が挙げられました。また、NGOやNPOが活発に活動している地域のほうが、そうでない地域より人口流出が少ないとの調査結果が報告され、そのような形の市民参画を促すことも提案されました。

運輸・交通部門

公共旅客輸送が未発達で、乗用車に対する依存度の高い地域では白タクの認可や予約型デマンドバスの導入、通学時にしか必要としないスクールバスを旅館や民宿の送迎バスとして利用することなどが検討されました。また、交通渋滞地域ではカーシェアリング制度の普及や公共旅客輸送機関での宅配便輸送が推奨されました。将来的には一人が一台のマイカーを利用するのではなく、「アワカーの共有」が人口過疎地においても密集地においてもベストソリューションとされました。

発想の転換

人口過疎地の流通システムをブロードバンドとオンラインショッピングに立脚させ、第三セクターはモジュール型(銀行、郵便局、宅配サービス、市町村の窓口などが共同利用するスペース)または移動式にすることが提案されました。また、空き家などを休暇用のコンドミニウムに改築することで雇用を創出するとともに観光収入源を確保することが可能とされました。

構造改革

エネルギー政策の転換を地方のチャンスと捉え、休耕地や産業跡地を風力発電、太陽光発電、バイオガス発電のために利用することが提

案されました。しかしながら、ドイツのように、農地をエネルギー作物の耕作に利用したために地価が不自然に高騰するような事態は回避すべきです。再生可能エネルギーの導入は、あくまでも地元の発展に資するものではなくてはならず、エネルギー事業の分散化による付加価値が他所に流出してはなりません。行政面で必要なのは、インフラ解体用の資金助成です。現行制度では新しいインフラ創出は助成されませんが、不必要となった建物や破損した建物の解体は手当てされないからです。

シンポジウムを締めるパネルディスカッションでは、日独間で共通する問題や解決策、そしてまた相違する点が確認されました。相違点は地方活性化措置で、日本では中央政権主導、ドイツでは地方政権主導であることが強調されました。日独で共通するのはトップダウン施策で、これは地元のニーズを満たさないことが多いと指摘されました。

結論

重要なのは、人々が地方に暮らし続けられるように新しいアイデアを練り、将来ビジョンを打ち立てることです。そして、働くことを望む高齢者には働く場があり、働きたくない高齢者は働かないでも生活できるようにでなければならない、ということで日独の参加者は合意に達しました。

日独相互に学び合い、熱心に討議し、双方に資する方策を紹介し合えたという意味において、本日独シンポジウムはきわめて有意義であり、今後も同様の交流が望まれました。



宮城県農業高等学校は津波により校舎、敷地が甚大な被害に遭い、別の高等学校に間借りした後、2011年9月1日から仮設校舎で授業をしています。2011年末にベルリン日独センターは同校の授業に必要なノート型パソコンおよび電子ピアノの購入費として7万5000ユーロを寄付しましたが、この度の訪問時には、音楽の授業で電子ピアノを伴奏にドイツ歌曲(リート)を披露していただきました。白石喜久夫校長は、同校では「音楽とスポーツも重視しており、生徒たち自身で野球場や柔道の道場を作った」と誇らしげに語ってくださいました。新校舎の完成は2018年を予定しているため、それまでは仮設校舎での授業が続きます。白石校長は、仮設校舎しか知らないまま卒業してしまう生徒たちに思いを寄せておられました。



改修不可能な規模の被災を受けた宮城県七ヶ浜町の図書センターは、七ヶ浜町生涯学習センター(中央公民館)へ移転することになり、ベルリン日独センターはその移転と生涯学習センターの改修にともなう総工費の一部として2011年末に5万ユーロを寄付しました。現在図書館業務は1階ロビーおよび体育館に設けられた図書コーナーで実施され、寄付金を基に進められた図書カードのデジタル化とデータ管理により、貸出し業務が円滑になったということです。七ヶ浜町の飯野直樹係長によると生涯学習センターの改修工事には2014年に着工し、2016年に竣工予定だそうです。

東日本大震災後、ベルリン日独センターは以上2機関を含む五つの事業に皆様方よりお預かりした義捐金を送りましたが、それら寄金が被災地復興に貢献しているのを嬉しく思います。

ベルリン日独センターはロバート・ボッシュ財団の協力を得て、日独のヤングリーダーズ（次世代の指導者たる幹部候補生）を対象とするフォーラムを設けています。その中心となるイベントがサマースクールで、2013年は「パワーシフトと新興市場」をテーマに東京で開校し、サマースクール終了後は京都で過年度のサマースクール参加者も交えた同窓会を開催しました。以下は、2013年度のヤングリーダーズの一人カトリン・ミンク（Katrin MINK, r b b ベルリン・ブランデンブルク放送所属テレビ編集者）による報告です。

「潘基文は君たちを必要としている」——2013年9月13日から19日にかけて東京で開催されたヤングリーダーズ・フォーラムの第8回サマースクールにタイトルをつけるとしたら、このようなものとなったであろう。しかしながら、国際連合事務総長にはしばらく待ってもらわなければならなかった。スカイツリー、浅草、渋谷——すなわち、心躍る10日間の幕開けとして大急ぎの都内観光、お土産の買い出し、居酒屋初体験を優先したからである。ドイツから日本を訪れたヤングリーダーズは新しい体験に目を見開き、日本人ヤングリーダーズは延々と続く行脚に溜息をついた。

2013年度サマースクールのテーマの背後に実際にあるもの、それに我々ヤングリーダーズが気付いたのは太陽が燦爛と輝く日曜日、六本木の国際文化会館のブラインドの降ろされた会議場においてだった。ハンス・マウル（Prof. Dr. Hanns MAULL, 2013年3月末までトリア大学の国際関係・外交政策教授、現在はベルリンのドイツ国際安全保障研究所（SWP）シニアフェロー）およびヨハネス・ガブリエル（Dr. Johannes GABRIEL, ベルリンの先見知識応用研究所（IAFI）所長）の両講師より、来る五日間の課題であるシナリオ構築という手法が紹介された後に我々は二つのチームに分かれ、それぞれ「2030年の世界秩序」と題するシナリオを作成した。陰鬱なシナリオ、混沌とした未来、自身に満ちた展望、どのようなシナリオでも良しとされ、「考えていけないことはない！」と繰り返し喚起付けられた。我々に与えられた課題は、新しい世界秩序をベースに、国連安全保障理事会の改革に向けた具体的な政策提言を作成することであった。

これは、決して簡単な課題ではなかったが、チームワークの強化には適切だった。ヤングリーダーズは経済・産業、学術・研究、政治、行政、ジャーナリズムと異なる分野に所属しており、それぞれの職務で培ってきた経験を投入し、建設的に討議し、生産的な成果をあげることができた。また、日独から著名なスピーカーを迎えたことで、政策の現場と理論から、シナリオ構築に資する示唆を得た。

思考実験とも言えるシナリオ構築では、二つの面白いアプローチが見られた。片方のチームは、2030年までに世界は多数の危

機を克服して happy happy world となっていると仮定し、「crises unite the world」と副題に冠するシナリオを作成した。二つ目のチームは未来を悲観視し、イスラム革命の後に世界経済が崩壊し、石油危機、水圧破砕法（ハイドロ・フラッキング）によるシェールガス開発の度重なる事故が続き、エネルギー資源の枯渇・制限、非国家主体の台頭、世界秩序の消失につながる「oil on fire」と命名したシナリオを作成した。

サマースクールの一環で国際協力機構（JICA）および東京の国連大学本部など会議場外の現実世界の視察は、我々ヤングリーダーズにとって喜ばしい息抜きだった。とりわけ国連大学本部では、ゴヴィンダン・パライル（Govindan PARAYIL）副学長および諸学部・学科の講師陣を前に作成したシナリオと、そこから導き出した政策提言を発表する機会を得、我々の考えの現実性をチェックすることができた。また、講師陣が我々のプレゼンテーションに感銘を受けたように見受けられたことで、大いに勇気付けられた。翌日はサマースクール最終日で、修了式を兼ねて在日ドイツ大使館に赴いた。最初に大使館建物と庭園を案内された後にフォルカー・シュタンツェル（Dr. Volker STANZEL）大使公邸において駐日外交団を前に、作成したシナリオおよび政策提言を発表し、居並ぶもの全員で討議、評価をした。そこで気付いたのは、外交官が政治の舞台を降りるのをきわめて嫌

うこと、たとえ仮説であっても政治以外の討議を避けることである。たとえば、「国際連合のすべての機構に、拘束力ある形で女性のクォーター制を導入することをどう考えるか」とロシア公使に質問したところ、なかなかストレートな返事がもらえず、10分間ほどのりくりりとかわされた後に、「あまり実践的とは思えない」という言葉でまとめられてしまった。これは、2013年度のヤングリーダーズだけでなく、現場にいた誰もの記憶に残ることであろう。このように、ヤングリーダーズの理想主義のワインが大量の水で薄められたにもかかわらず、ハンス・マウル講師の楽観主義が揺らぐことはなかった。

サマースクール終了後、新幹線のぞみで瞬く間に、ヤングリーダーズ・フォーラム同窓会の開催地である京都に到着した。典型的な日本風スタイルの同窓会で会場は旅館、約35人のOB、OGが浴衣姿で待ち受けていた。第一夜はパーティだったが、翌日から「成長著しい新興市場が政治的世界秩序や日独をはじめとする経済大国に及ぼすリスクとチャンス」にまつわるディスカッションや講演が続いた。また、地場産業からグローバル企業に転身した京都の株式会社堀場製作所を訪問し、室賀裕一（株式会社堀場テクノサービス代表取締役社長）のスピーチから、新興工業国市場に進出する日本企業の戦略を垣間見ることができた。同窓会に参加した50人弱の現役ヤングリーダーズおよびOB、OGも八つのグループに分かれてイタリアの高級オートバイメーカーやコーヒーチェーン店の新興工業国市場進出の戦略を練ってみたが、それら戦略が企業に受け入れられる可能性は永遠に未知のままである。



2013年9月10日～24日にかけて、文部科学省と独連邦家庭高齢者女性青少年省主催の「日独学生青年リーダー交流」の一環で日本団がドイツを訪問しました。派遣団の選考と準備は(独)国立青少年教育振興機構が、受入日程の企画と実施はベルリン日独センターが担当しております。以下に、男女1名ずつの声を紹介します。

私の夢は「ドイツに行くこと」だった。その夢は私が思っていたよりも早く、17歳の夏に叶えられた。実際にドイツに行ってみると日本と空気感が似ていたため、私の世界観は予想していたほど広がらないように思われた。私は初めての外国がとても身近に感じられ、ベルリンやドレスデンの町の雰囲気や安心し、ふるさとのような暖かさを感じていた。だから私は、日本と同じような生活習慣を戸惑いもなくできた。たとえば、道もわからないのに、朝ランニングに出かけたり、ホテルの近くのスーパーに行き、安売りの商品を探したりしていた。このように他国に行っても自分の習慣はそのまま続け、日本の文化を持ち込むことができると錯覚していた。

ところが、ドイツに滞在している間にそれぞれの「文化」の隔たりを痛感することになる。私たちは小学校を訪問し、そこに通っている子どもたちと交流する機会があった。私は、一人の移民背景を持ったトルコ人の男の子と仲良くなった。彼と一緒に絵をかきをしたとき、まず、拳銃を持った巨体の男を描いた。その男は彼によると怒っている表情をしていて、拳銃から銃弾が飛んでいる先には小さい体をした悲しそうに顔をしている男もいた。

まだ小学校5年生ぐらいの男の子が最初に拳銃の絵を書いたことに私は衝撃を受けた。男の子は、日本の子どもたちが両親の似顔絵や戦隊レンジャーを描くのと同じように気軽に描いたのかもしれない。でも私は移民に対するイメージから、彼には過去に拳銃で恐怖を覚えたことがあったのかもしれないと連想した。この考え方では彼への「移民」としての偏見につながるであろう。このように、単純なイメージから判断するのは簡単であるが、誤解と偏見を及ぼす。

ドイツでは、「文化」の中にある価値観の違いを実際に肌で感じ、驚いた。そのような場面に直面したとき、私はいつも、「なぜ？」と心の中で叫んだが、「？」を解決することは難しかった。解決するべく、私たちは自分の過去の経験の範囲で問題を処理しようとする。その結果、すべてをひとつの視点だけで捉えてしまう。知識不足から偏見にしないためには、日頃からの様々な方面からの情報を受信していくことが大切だ。そして、一度持った偏見は、自分次第でいくらでも変更可能である。私はきっとこれからの人生で

様々な人たちに会い、彼らの意見を聞く機会があるだろう。そのときは、ひとつの意見として受け入れ、そして知識を積み重ね、最終的には異文化理解につなげていこうと思う。
(金子友美)

今回の訪問、一番初めに、私はドイツを「違う町」だなと感じた。「違う国」ではない。日本から異国に来た、ではなくちょうど国内の違う町に旅行しているというのと同じ感覚だった。この感覚は、以前シンガポールへ旅行に行った際も感じたものであったが、今回それが確信に変わった。たとえば、ホームステイ先の5歳の男の子と一緒に遊ぶとき。言葉は全く通じないが、それでも一緒に絵本が読めるし、パントマイムで笑わせることだってできる。生活する環境や社会の仕組みは違っても、感情や表情といった根本では日本もドイツもほとんど変わらないと感じた。この考えに至ってから、私はこの事業でドイツについて学んだというよりも、ドイツという場を通して多くのことに気付いたのだと考えるようになった。以下にその気付きのいくつかを挙げる。

まずは自分の「町」である日本について。典型的だったのは、本屋でたまたま開いた日本観光案内本から見えた日本の姿である(日本の観光名所のひとつとして新幹線が京都と並んで紹介されていた!)。このほかにも、ドイツ

団が来日した際の感想などを通して、外側から見た日本は私にとって新鮮であった。

次に、イメージ、固定概念について。合宿セミナーでの議題にもあったが、私たちは少なからずイメージや固定概念を持っている。たとえば、ドイツ人のイメージというのは、これまでの知識に基づいており、実際に出会った後で改められるものもあれば、変わらないものもある。私が今回感じたドイツ人の特徴や本質は日本人と変わらないといった感想も、あくまで私が出会った人、目にした範囲での知識であり、未だ更新の余地がある。不十分な知識で簡単に思い込みを抱くのは正しくないという考えは今回の議論の成果であるが、社会にはこれまでもこれからも一度抱いた固定概念を捨てようとする人間がいるのも、私たちが相手の日本に対するイメージに影響を及ぼしたことも確かである。私たちは日本に対する責任を持って行動しなければならないし、それは自分の学校や所属する団体に対しても同じことである。

私たちは幸運なことに総選挙直前のドイツを訪問することができ、研修テーマである「若者の社会参画」を考えるのにとっても適した環境であった。また同時に、私が自分の考えを深めることができたのは、ザクセン州青少年連合のトルンポルド(Wencke TRUMPOLD)さんと団長副団長はもちろんだが、何よりも、たくさんの優れた同世代の存在のおかげである。団員一人ひとりがそれぞれリーダーとして活動できるほどの能力と個々の意見を持ったこのチームは、それ自身が「一人ひとりが参画する」とはどういうことかを表現していた。
(土井遼太郎)





質疑応答——ベルリン日独センターは三菱総合研究所プラチナ社会研究会とともに日独シンポジウム「少子高齢化時代における企業」を開催しました(2013年11月6日、於三菱総合研究所)。三菱総合研究所が高齢社会をシルバーではなくプラチナと名づけたのは、シルバーとは異なりプラチナは輝きを失わず、また金より品格が感じられるからだそうです。



基調報告——名古屋大学大学院環境学研究科と協力して日独シンポジウム「日独自体エネルギーシフト戦略——地域からの挑戦」を開催しました(2013年10月24日、於名古屋大学)。本シンポジウムに先立ち、日本から5市町村の代表者がドイツを訪れ、ドイツの地球温暖化防止政策およびエネルギー政策の視察旅行をしました。



パネルディスカッション——日本成年後見法学会および独日法律家協会と日独シンポジウム「日本成年後見法制度・独世話法制度における医療行為と健康配慮」を共催しました(2013年11月22日、於ARQIS法律事務所)。

会議系事業

国際社会における日独の共同責任

国際会議「日本・ドイツ・アフガニスタン」
協力機関：コンラート・アデナウアー財団(ベルリン)、公益財団法人世界平和研究所(東京)
開催予定日：2014年9月、東京開催

国際ワークショップ「沈込み帯における大型地震と津波——予測可能性およびリスクアセスメントへの貢献」
協力機関：アテネ国立観測所、災害リスク統合研究計画(北京)
2014年10月5日～7日、ロドス島(ギリシア)開催

第5回日独安全保障ワークショップ
協力機関：ハインリッヒ・ベル財団(ベルリン)
開催日未定

天然資源、エネルギー 地球温暖化、環境

日独会議「デザイン」
協力機関：ドイツ連邦共和国大使館(東京)
開催予定日：2014年10月、東京開催

日独シンポジウム「再生可能エネルギー——政治、法律、社会の課題」
協力機関：公益財団法人自然エネルギー財団(東京)、早稲田大学(東京)、フリードリヒ・エーベルト財団(ベルリン)
開催日未定、東京開催

少子高齢化社会

日独会議「指導的立場に立つ女性」
協力機関：ドイツ経済研究所(ベルリン)、経済広報センター(東京)、ドイツ連邦共和国大使館(東京)
2014年5月、東京開催

日独ワークショップ「少子高齢化の進む中規模都市の文化政策」
協力機関：神戸大学、ザクセン州文化インフラ研究所(ゲルリッツ)、ベルリン自由大学、国際交流基金(東京)
2014年9月4日～7日、ベルリンおよびゲルリッツ開催

日独会議「少子高齢化の進む都市を対象とする持続可能なまちづくり」

協力機関: 明治大学(東京)、GRAS建築設計都市計画事務所(ドレスデン)、国際交流基金(東京)

開催日未定、東京開催

学術振興を通じた社会発展

日独シンポジウム「予防医学」

協力機関: 千葉大学、フンボルト大学医学部附属病院(ベルリン)

2014年2月18日

第2回思索工房「世紀における日本——変遷過程中的社会」発表会

協力機関: ベルリン自由大学、ロバート・ボッシュ財団(シュトゥットガルト)

開催予定日: 2014年5月

国家、企業、市民社会

竹中平蔵講演会

「アベノミクス: イノベーションと構造改革」
2014年1月27日

日独シンポジウム「東南アジアにおける新しい市場」

協力機関: 富士通総研(東京)、ドイツアジア太平洋ビジネス協会(ハンブルク)

2014年2月11日

日独会議「新興アジア地域における日本の社外取締役」

協力機関: マックス・プランク学術振興協会所属外国社会法・国際社会法研究所(ハンブルク)、独日法律家協会(ハンブルク)

2014年7月17日～19日

日独会議「スマートシティ&ソーシャルシティ」

協力機関: ベルリン州政府、ベルリン州都市計画庁

2014年9月30日、東京開催

日独会議「アントレプレナーシップ」(企業家精神、起業家精神)

2014年10月

日独会議「信頼・信用」

協力機関: 現代日本社会科学学会

2014年11月21日～24日

日独パネルディスカッション「ロボット倫理」

協力機関: 筑波大学

開催日未定

諸文化の対話

国際シンポジウム「視点の変更と異文化間の対話」

協力機関: ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川(京都)

2014年2月5日

日独学生セミナー「欧州政策」

協力機関: オツツェンハウゼン欧州アカデミー、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター、ドイツ学術交流会(ボン)

開催予定日: 2014年9月

特別事業

日独フォーラム第23回全体会議

協力機関: 独連邦外務省(ベルリン)、日本国外務省(東京)

開催予定日: 2014年秋

文化事業

ダーレム音楽の夕べ

新春コンサート

2014年1月中旬

マリンバ、フルート、ピアノのコンサート

2014年3月21日

伊藤聖子ポートレートコンサート

開催予定日: 2014年10月中旬

クリスマスコンサート

2014年12月中旬

江戸の音楽

開催日未定

展覧会

グループ展「無意識の自然法則」

展示期間: 2014年1月31日まで

デルフィーヌ・パロディ=ナガオカ、多和田葉子二人展「The End is Where we Start From」福島県の写真および詩の展覧会

オープニング: 2014年2月17日

展示期間: 2014年2月18日～3月28日

若手アーティストグループ展「Physis」

展示期間: 2014年4月中旬～6月初旬

雨田光弘「音楽の絵画展」

展示期間: 2014年6月中旬～8月下旬

畑洋子、ハリエット・グロス二人展「GUP-py + Groß „ge schicht en“」

オープニング: 2014年9月11日

展示期間: 2014年9月12日～10月末

四方菜々子、シュテファン・ザイツ二人展「絵画と彫刻」

展示期間: 2014年11月初旬～2015年1月初旬

その他

Study Fair Japan 2014

協力機関: 早稲田大学、在ドイツ日本国大使館(ベルリン)

2014年1月30日

オープンハウス

2014年6月21日

対話サロンI、II、III

開催日未定

人的交流事業

- ・日独若手専門家交流
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・研修プログラム
 - 日独青少年指導者セミナー
- ・日独勤労青年交流プログラム
- ・日独学生青年リーダー交流プログラム

各プログラムの詳細はwww.jdzb.de → 人的交流事業

展覧会観覧時間

月曜日～木曜日10時～17時

金曜日10時～15時30分

会場についてほかに記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。
詳しくはwww.jdzb.de → 個別事業



ゲラルド・クリスト写真展「SILENCE #1, #2 - The Japanese Series」の開会式で挨拶する坂戸勝ベルリン日独センター副事務総長(2013年10月10日、於ベルリン日独センター)、左に立つのが写真家ゲラルド・クリスト(Gerald CHRIST)。本写真展は2013年11月27日に終了しました。



現代日本社会におけるハーフの若者たちの葛藤を描き出すドキュメンタリー映画「ハーフ」(2013年、監督:高木ララ、西倉めぐみ、www.hafufilm.com)をドイツで初めて上映した後、監督の高木ララ(Lara PEREZ TAKAGI)および政治風刺漫画家のハイコ・サクライ(Heiko SAKURAI)の日系ハーフ2名をお招きして対話サロンを開きました(2013年10月24日、於ベルリン日独センター)。

10月24日はベルリン市内の「図書館ナイト」(図書館の開館時間を夕方から夜間に延長する日)にあたり、ベルリン日独センターも参加しました。大勢の人々が来館し、本を手に取り、館員に質問し、有意義な時間をお過ごしいただきました。



写真上:ドイツ大学学長会議、大学マネジメント研究会、I R I S 科学技術経営研究所(東京)と共催した日独ワークショップ「両国大学機関における伝統と革新」の際のラウンドテーブル(2013年10月21日、於ベルリン日独センター)。

写真右:オツェンハウゼン欧州アカデミーと東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターと共催した第2回日独学生セミナー「欧州政策」(2013年9月26日~27日)に参加中の大学生たち。



ベルリン日独センターは、ベルリンのエコロジー協会の年次総会に併せてパネルディスカッション「エコロジーとソサエティの新しい架け橋——科学と政治のインターフェースに関する日欧経験交流」(2013年9月9日、於ポツダム大学)を企画実施しました。その枠内で、出席者に和太鼓の演奏をお楽しみいただきました。



ハインリッヒ・ベル財団と日本国際問題研究所軍縮・不拡散促進センターと共催で、「日本・北大西洋条約機構(NATO)共同政治宣言にみる将来的協力関係」をテーマに第4回日独安全保障ワークショップを開催しました(2013年9月6日、於ベルリン日独センター)。